

小児アレルギー・リウマチ研修カリキュラム

専門医資格取得の要件

I. アレルギー専門医（日本アレルギー学会「専門医制度規程」より抜粋）専門医として認定を受けるためには、次の各号の全てを満たさなければならない。

- (1) 日本国の医師免許を持つ医師であること
- (2) 認定時に引き続き5年以上本学会の会員であること
- (3) 内科、小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科など基本領域の学会（以下、「基盤学会」という。）の専門医（認定医）資格の認定を受けていること
- (4) 基本領域の臨床研修を含め通算6年以上の臨床研修歴を要する。この研修歴6年の内、臨床研修期間は実質的な研修期間とし、留学、出産、育児休暇、長期療養期間は含めない。通算3年以上は本学会認定アレルギー専門医教育研修施設等において、本学会認定指導医又は専門医のもとでの、別に定めるアレルギー専門医カリキュラムに従ったアレルギー学の臨床研修を要する。ただし、施設の専門、地域等の格差により施設での研修が困難な場合は、第32条の研修方法により所定の臨床研修を受ける。
- (5) 最近の5年間に自ら診療しているアレルギー疾患患者40名分の診療実績書の提出
- (6) 前項提出患者の内2例についての症例報告書の提出
- (7) 最近の5年間に別表1に示すアレルギー学の業績が50単位以上あること
ただし、下記1)～4)の学術大会等の内2項目以上を組み合わせ、合計3回の出席を必須とする。
 - 1) 本学会2013年開催までの秋季学術大会1回以上
 - 2) 本学会2014年開催までの春季臨床大会1回以上
 - 3) 本学会2015年以降開催の学術大会2回以上
 - 4) 本学会2014年以降開催の総合アレルギー講習会1回以上
- (8) 専門医資格認定試験に合格していること

- II. リウマチ専門医（日本リウマチ学会「専門医制度規則」より抜粋） 専門医認定試験の受験資格は、次の各号の条件を満たし、別に定める リウマチ専門医研修記録（以下「研修記録」という）を専門医資格認定委員会が審査し、受験資格を認めた者とする。・日本国の医師免許証を有し、医師として人格及び見識を備えている こと。
- ・申請時において引き続き5年以上学会の会員であること。
 - ・第2条第4項によって認定された教育施設において、別に定める専門医研修カリキュラム（以下「研修カリキュラム」という）に従い通算5年以上のリウマチ学の臨床研修を行ったこと（臨床研修実績を研修記録に記載のこと）。
 - ・日本リウマチ学会専門医資格維持施行細則による単位30単位以上を取得していること（取得単位を研修記録に記載のこと）。
 - ・日本専門医制評価・認定機構が認定している基本領域学会の認定医或いは専門医の資格を有すること。

研修カリキュラム

- I アレルギー専門医・研修カリキュラム（日本アレルギー学会指定）
http://www.jsaweb.jp/modules/specialist/index.php?content_id=3http://square.u-min.ac.jp/endocrine/senmon_i/curri/curriculum_sho.pdf
- II リウマチ専門医・研修カリキュラム（日本リウマチ学会指定：会員限定公開）
<http://www.ryumachi-jp.com/authorization/proseido.html>
・フローチャート
<http://www.ryumachi-jp.com/doctor/senmoni.html>

指導医（認定指導医と当該専門医）

- I 日本アレルギー学会認定指導医 星岡明、富板美奈子、山出晶子アレルギー専門医（小児科） 星岡明、富板美奈子、山出晶子
- II 日本リウマチ学会認定指導医 富板美奈子
リウマチ専門医 星岡明、富板美奈子、山出晶子

教育実績

アレルギー専門医取得 3名 リウマチ専門医取得 1名
日本小児リウマチ学会専門研修受け入れ 1名

教育施設の特徴

アレルギー研修：千葉県内で数少ないアレルギー専門医が複数在籍する施設として、県内からアレルギー疾患の患者が多く紹介されてきます。現在は、食物アレルギーの紹介が多く、必要な症例には積極的に負荷試験を行い、経口免疫療法を行っています。また、千葉大学医学部附属病院、下志津病院と連携して、臨床研究や患者会のサポートを行っています。

リウマチ・膠原病研修：当院は県内唯一の小児専門の整形外科があるため、関節炎・関節症状を有する患者が多数紹介されてきます。全身症状が少ないため小児科を受診しない少関節型の若年性特発性関節炎の患者数は、全国の小児リウマチ専門施設の中でも1,2を争います。シェーグレン症候群、全身性エリテマトーデス、若年性皮膚筋炎などその他の膠原病の患者も多く診療しており、これらの患者には他科との連携をとりながら、生物学的製剤も含め、現在の日本で可能な最新の治療を行っています。

アレルギー疾患もリウマチ膠原病も「免疫の異常」という観点から病態を考えながらの診療をしています。週1回の千葉大学小児病態学免疫グループの研究ミーティングに参加して、臨床にも基礎にも通じる scientific な考え方を身につけられるようにします。免疫は体内で起こる様々な現象に関わっています。当科で専門的な考え方と診療技術を身につけましょう。